

車争い前後の六条御息所

『源氏物語』表現論覚書

鈴木日出男

一

六条御息所が生霊となつて葵の上にとり憑かねばならなかつた由因について、最も直接的にふれてゐる叙述は、御息所自身の判断を含んでいる次の叙述である。

大殿（葵の上の父左大臣）には、御物怪いたう起こりて
いみじうわづらひたまふ。この御生霊、故父大臣（御
息所の亡き父大臣）の御霊など言ふものありと（御息所
が）聞きたまふにつけて、思しつづくれれば、身ひとつ
のうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなけ

れど、もの思ひにあくがるなる魂はさもやあらむと思
し知らるることもあり。年ごろ、よろづに思ひ残すこ
となく過ぐしつれどかうしも碎けぬを、はかなき事
（車争い）のをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてな
すさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮
まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたま
ふ夢には、かの姫君（葵の上）と思しき人のいときよら
にてある所に行きて、とかく引きまさぐり、現にも似
ず、猛くいかにきひたぶる心出で来て、うちかなぐるな
ど見えたまふこと度重なりにつけり。あな心うや、げに
身を棄ててや往きけむと、うつし心ならずおぼえたま

ふをりをりもあれば、さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれはいとよう言ひなしつべきたよりなり、と思すに、いと名立たしう、「ひたすら世に亡くなりて後に怨み残すは世の常のことなり。それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、現のわが身ながらさるうとましきことを言ひつけらるる、宿世のうきこと。すべてつれなき人（源氏）にいかで心もかけきこえじ」と思し返せど、「思ふものを」なり。（葵二九—三二頁）^{（1）}

懷妊の葵の上を苦しめつづける、得体の知れぬ物の怪の執念深さが世に喧伝されている。右によれば、その噂のなかに、六条御息所の今は亡き父大臣の靈魂のしわざだという風評もあったという。しかし物語には、この「故父大臣の御霊など言ふものあり」という叙述を直接に裏付ける叙述がなく、そのかぎりではいかにも唐突である。そうした疑問から、近時、物語の語られざる背後に実は御息所の父大臣の、廃太子事件にまつわる敗北の経緯があったにちがいない、と推論する説も提出されるようになった。すなわち右の叙述は、書かれざる廃太子事件の犠牲者となった父大臣の、敵対勢力とみられる左大臣（葵の上の父）家への怨

恨から出現しうる靈魂ではないか、とみられるのである。^{（2）}

これは世人の噂の根拠としての、事実の裏付けを想定する読み方である。確かに、故父大臣の左大臣家への怨念を裏付ける事実がなければ、噂にさえならなかったであろうから、これはこれで説得力がある。

翻るけれども、こうした物語の背後を読もうとする読み方は、古注釈以来の広義の准拠説の立場とも無縁ではあるまい。事実これに関しても、『花鳥余情』以来諸注釈に「具平親王宇治の関白靈氣に出で給ふ事、栄花物語第十二にあり」（細流抄）などと踏襲され、政変に関わる特定の史実によって補強されるべき叙述であるとみられてきた。もとより『源氏物語』の表現の最大の特徴は、広義の准拠説も成り立つような、その個々の叙述の背後に特定の事実や心情その他が想起されるべく、文章が特定の連想作用を帯びながら豊富な想像力を喚起させる点にあると思われる。そのような視点からみれば確かに、この生霊事件は御息所一個人の心情によったというだけではなく、亡父のそれをも含むものとして読まれるべきであらう。となれば、物語上彼らは怨霊の家系の人々という独自な位相を占めることになる。すなわち六条御息所は、そのように無意識のうちに

も家霊と関わり、いわば怨霊の家系の代表でありえた。実はこの家霊と関わる御息所の無意識の一面は、光源氏が御息所と関わらねばならなかった根源的な意味、具体的には特に後年の六条院造営の問題などで最も重要な意味をもってくるものである。³しかしそれはそれとして右の一連の叙述によれば、そのような彼女がここであらためて車争い以後の苦悶に発した生霊の人物として登場してきたということである。右のように物語の直接的な叙述では、六条御息所自身の判断として、現在葵の上を苦しめている物の怪が、実際には父大臣の霊魂であるよりも、自分自身の生霊にほかならなかつたという真相を明らかにしている。しかば、その必然性を物語の表現の脈絡から跡づけてみようと思う。つまりここでの問題は、六条御息所という人物がいわゆる家霊を背負う独自の存在であるにしても、なぜ自らの生霊出現の必然性を納得し自認しなければならなかつたのか、という点にある。

右の御息所自身の判断によれば、「身ひとつのうき嘆き」が、おのずと「もの思ひにあくがるなる魂」となつて葵の上にとり憑いている、としている。御息所以外には「はかなき事」としかみられない車争いを、当の彼女が「人の思

ひ消ち、無きものにもてなすさま」の痛恨事として体感したというのは重大であろう。この、他者の認識である「はかなき」と、自身の認識である「人の思ひ消ち、無きものにもてなす」は、たがいに連動しあう関係にある。他人にはとるにたりない些細さであるだけに、かえって無視される自分が切実に痛恨されるのである。こうした他者と自己との緊張的な対比関係が右の御息所の心中叙述全体を貫いている。後半においては、「さらぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば」と悪評をたてたがる世人一般の習性を根拠として、「ましてこれはいとよう言ひなしつべきたよりなり」と世間のさらし者に格好の自己が見すえられている。「……だに……まして」の呼応の文脈が、他者としての世間とそこから反転する自己存在を相対的に位置づけている。そして再びここに世間的常識的な一般論が媒介されて、「ひたすら世に亡くなりて後に怨み残すは世の常のことなり。それだに、人の上にては（他人の身の上としては）、罪深うゆゆしきを」と続くところから、その文脈はおのずと自己認識へと回帰していく。ここでは副詞「まして」などはもはや自明の理として切り捨てられ、濃密な文脈のなかで「現のわが身ながらさるうと

ましきこと（生霊がとり憑くこと）を言ひつけらるる、宿世のうきこと」としか言いようのない自分自身が確認されている。そして、他者である世間とのこのような相対的思考によつてたどりついたのが、「宿世のうきこと」の自己認識であつたことに、あらためて注意する余地がある。なぜなら、右の引用の前半にも「身ひとつのうき嘆き」とあり、御息所の思考は常に「うし」の自己認識に落ちつくし、かないとみられるからである。もとより「うし」は、自分の思いどおりにならぬ憂鬱さを表す語ではあるが、「宿世」とともに用いられる例も多く、わが人生の総体を運命的に把捉する気持の濃厚な語である。この運命的な認識をはらんだ語が、右の叙述以前の御息所の叙述に用いられたかどうかを一瞥すると、次のごとくである。

1 影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいと
ど知らるる (一八頁)

2 (伊勢下向を) 定めかねたまへる御心もや慰む、と立ち
出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよるづ
いとうく思し入れたる。 (二五頁)

3 袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみ
づからぞうき (二八・九頁)

1は葵の上一行に車を蹴ちらされた後に源氏の晴れがましい行列を無念の思いで見物した折の独詠歌、2は後日その車争いの無念さを思いかえす心情叙述、3はさらに後日の源氏への贈歌。いずれも車争い事件を契機としているのだから、「うし」の自己認識は確実に車争いと関わっているらしい。またここには前述の、世人と相対的に関係づける思考の方法も関わっている。しからばこれらがどのような関連づけられるかを、物語の当初に溯つて考えてみようと思う。

二

周知のごとく「葵」以前の巻々では、点描程度の叙述でしかなく、しかも六条御息所その人と認めるか否か古来問題視されてきた叙述ばかりである。「若紫」巻の「おはする所は六条京極わたり」(三〇九頁)ぐらいでは、御息所本来の高貴で奥ゆかしい人物像がまだ定まっていな段階といわれる。しかし問題なのは、「若紫」巻よりも詳細で、それだけに後記挿入説とも関連することになる「夕顔」巻。たとえば、

六条わたりにも、とけがたかりし御気色を、おもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるること、いとさまざまなり。(夕顔・二二二頁)

成立過程上「葵」巻以後からの逆移入が十分に考えられるだけに、御息所の人物像として何らの矛盾もないばかりか、「葵」巻冒頭での登場の唐突さがこれによって補われることにもなる。すなわち、源氏が動じたい御息所をついに口説き落とした云々の経緯はここではじめて語られたことになる。そして、「いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざま」は、後に生霊出現の人となるのに十分ふさわしい性格づけであらう。しかも「齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに」という対世間の考慮も前述の「葵」巻に近似している。しかしながらここでは、「人の漏り聞かむに」の推量形によっているのであり、いまだ現実のものとはなっていない。その推量の内容もせいぜい、源氏に

ふさわしからぬ年齢差ゆえに、ぐらゐのところにとどまっている。彼女は、六条わたりで人目にもつかず秘かに源氏の来訪を待ちながらも、その夜離れに屈している孤独の女人像として設定されているにすぎない。

ところが「葵」開巻とともに、物語展開の中心にすえらる御息所像は、内容的には右の「夕顔」巻と矛盾こそしないが、その物語での扱われ方、つまり人物造型の方法において注目すべき差違をみせることになる。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮齋宮にゐたまひにしかば、大将(源氏)の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさのことにつけて、下りやしなましと、かねてより思しけり。院にも、かかることなむと聞こしめして、……(二二頁)これが御息所物語の開扉であった。物語の語り手は、新たな話題に転ずるための常套句「まことや」によって、娘齋宮とともに伊勢下向を決行するか否か、言いかえれば源氏との仲を諦めるか否かを決しかねている御息所の存在を、あらためて物語にひき出してきたのだ。冒頭の「まことや」は末尾の「けり」に呼応して、そういえばこのような御息所の存在にはじめて気づいた、という体の語り口であ

るが、その末尾に「かねて」の語が割り込んでゐる点にも注意されよう。「かねて」とはいえ、姫宮の齋宮決定は御代替り（朱雀帝即位）に伴つて行われたのだから、それ以前ではない。したがって、遠からぬ過去のその時点から、母御息所は二者択一の判断にせめられているのであり、しかもここでの御息所の決しがたい苦悩は彼女ひとりの心内にだけとどまるのでもなく、次に「院」にも、かかることなむと聞こしめして」とあるように周辺にその苦衷の事実が報ぜられてゐるのである。もとより娘齋宮という公的な立場から、母親の下向するか否かの決断も完全に私事にとどまる性質のものではない。そして判断に迷う御息所が世間の口の端にものぼせられるようになった、そういう異様な状況なればこそ語り手の注意を惹いたのだともみられよう。語り手と桐壺院との間は、御息所を注意深く見ようとする関心において連続している。前掲「夕顔」巻の、ひとり夜離れに堪えるだけの生活と比べれば、このしだいに外部に洩らされてゆく御息所の苦悩のあり方には大きな変化相違があるといわねばならない。

御息所の苦悩を聞き知る桐壺院の思惑は、光源氏への諫言として語られてくる。「故宮（亡き東宮）のいとやむごと

なく思し、時めかしたまひしものを、（源氏が）軽々しうおしなべたるさまにもてなすながいとほしきこと。齋宮をもこの皇女たち（桐壺院の皇女たち）の列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすきびにまかせて、かくすぎわさずするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」（二二頁）などという院の言辭によれば、かつて東宮に寵愛された御息所の輝かしい半生が、現在は無残にも踏みにじられそうだと見ている。そして女の無残さを招来させるのは、女が世人の悪評にさらされるからだともいう。『岷江入楚』が「いづ方につけて」に注して「何事につけても御息所へ源のかよひ給ふ程ならば、おろかなるまじき事ぞとなり」と説き、また「心のすきびにまかせて」云々について「かりそめなるやうになど申かよひ給ふ事はあしき事なり。あるまじき事ながら、せめて懇にも思ひ給はゞ然べきなり。かるくしくし給ふはいよく世の人のもどくべき事と也」とする見解でも明瞭なように、源氏の粗略な態度が御息所を嘆かせ、そのことが世間の悪評を生んでさらに御息所の痛恨を深めさせる、という理屈がたどれるであろう。こうして桐壺院自身が御息所の生きざまを凝視しているのだが、のみならず世間一般の彼女への

注視もまた設定されている。それは院の言辭にもあるように、輝かしい半生を生きた人生であっただけに衆目の関心事になりやすいという必然をはらんでいる。

これを御息所自身はどのように認識していたか。

女も、似げなき御年のほどを取づかしう思して心とけたまはぬ気色なれば、(源氏は)それにつつまたるさまにもてなして、院に聞こしめし入れ、世の中の人も知らぬなりにたるを、深うしもあらぬ(源氏の)御心のほどを、いみじう思し嘆きけり。(二三頁)

年齢差を苦にする御息所の遠慮がちな態度に、あたかも同調するかのごとき源氏の薄情さ。それを見抜く御息所の苦衷を語っているが、この文脈に挿入句として「院に聞こしめし入れ、世の中の人も知らぬなりにたるを」が挟みこまれていたために、女の苦悩はいよいよ深刻となる。これが御息所の思念のなかではじめて、自分は世間に見られているという感覚の賦与された叙述である。

物語は右に連接して、朝顔の姫君を点描し、彼女が御息所をどう見たかを語る。

かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じ、と深う思せば、はかなきさまなりし御返り

などもをさをさなし。さりとして、人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御気色を、君(源氏)も、なほことなりと、思しわたる。(二三頁)

物語中、朝顔の姫君という人物は、源氏の懸想に感動しつつも感情のままになびいてはならぬと常に自制しつづける女君として一貫している。ここでもその独自な人となりが語られているが、「かかることを聞きたまふも」と六条御息所と源氏との不幸な関係を聞き知ったことが彼女の自己制御の根拠になっている。そしてまた「いかで人に似じ」という、自分は御息所の二の舞だけは演じたくないとする心情は、逆に御息所の苛酷な人生を浮かびあがらせてもいよう。明確な観念を持した朝顔の姫君の存在は、それゆえに相対的な確かさをもって御息所という他者を見つめることのできる一つの視点となっている。

さらに続いて物語は、源氏の正妻葵の上方へと受けつがれる。

大殿には、かくのみ定めなき御心を心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御気色の言ふかひなければにやあらむ、深うも怨じきこえたまはず。心苦しきさまの御心地(懷妊)に悩みたまひてももの心細けにおぼいた

り。(源氏は)めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰も誰もうれしきものからゆゆしう思して、さまざまの御つつしませさせたまつりたまふ。かやうなる(葵の上の懷妊)ほど、いとど御心の暇なくて、思しおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし。

(二三～四頁)

六条御息所その人だけを見ているわけではないが、源氏のあきれるばかりの浮氣事に言う言葉も知らぬという、その愛人のなかには御息所の噂も当然入っているはずである。「かくのみ」は承前の語法であり、『岷江入楚』の「御息所の事、又権姫君などの事なり」の読み方とおりでであろう。源氏その人に即したこの觀察は、正妻方としてふさわしい視点であるとともに、朝顔の姫君の場合とは異なるもう一つの視点からの真実を引き出している。「あまりつつまぬ御氣色の……深うも怨じきこえたまはず」の叙述は、源氏に対する絶望的な苦衷であるよりも、当座は諦めつつも遠い将来を待とうとする期待感を含んでいる。ここに権門勢力に裏づけられた正妻の座の強みもうかがわれるが、それだけに御息所の弱小さが浮かびあがってくる。源氏をはじめ人々が葵の上の懷妊に歓喜し緊張するという行文にも、

そうした二人の女君の相對關係を読みとることができよう。そしてこの文末を、「思しおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし」と、源氏と御息所の關係をいう語り手の草子地めいた語法で結ぶのも特徴的である。この語り手は、葵の上方に立脚しながらも、絶えず御息所方を觀察想像する位置を保っている。

以上、六条御息所登場以来の物語をなぞってきたが、ここでは御息所が徹底的に見られる存在であることが知られる。桐壺院・朝顔の姫君・葵の上らの特定人物、あるいは世人一般がそれぞれの固有の立場から御息所を見ることによって、彼女の位置が相對的に明証されてくる。これは、語り手の視点をも導入しながら、しかもその語り手が如上の人物たちの間を出入りして物語の全体を構成するという方法において達成されている。さて当の御息所はどうか。彼女も自分が世人に見られていることを認識し、その世人の目を畏怖している。しかし物語における桐壺院・朝顔の姫君・葵の上らの、御息所に対する具体的な觀察は、觀察される本人の想像以上にまじまじと克明であるといつてよい。見られたくない御息所を、他の作中人物や語り手たちが多様な角度から觀察することになった。したがってこれ

が、「夕顔」巻の、源氏の夜離れを秘かに嘆く御息所の造型方法とは異なるゆえんである。

三

後続の物語は、新斎院御禊の日の、例年になく盛大な葵祭見物の場を設定する。すなわち光源氏の加わる行列を見ようとする群衆の熱狂的な場が開かれてくる。ここでは見られる役が光源氏だが、もちろんさきの御息所の役柄とは異質である。葵の上付きの女房が見物できぬ不満を「おほよそ人（源氏と無縁の人）だに、今日の物見には、大將殿（源氏）をこそは、あやしき山がつさへ見たてまつらんとすなれ。遠き国々より妻子をひき具しつても参うて来なるを、御覽ぜぬはいとあまりにもはべるかな」（二五頁）と訴える言辞からもわかるように、源氏の無類の麗姿こそが見ものであった。さらに右の叙述には、その光源氏を媚君に擁する左大臣家の人々の優越感と自信が誇示されているが、その集団がそのまま都大路の見物の一隅を得意然と占めることになる。その名高い車争いの一節を掲げよう。

(1) 日だけゆきて、（葵の上一行は）儀式もわざとならぬさ

まにて出でたまへり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしうひきつづきて立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。（御息所の供人）「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と、口強くて手触れさせず。いづ方にも、若き者ども酔ひすぎ立ち騒ぎたるほどのことは、えしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は、「かくな」などいへど、え止めあへず。

(2) 斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。葵の上方「さばかりにては、さな言はせそ。大將殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車ども立てつづけつれば、副車の奥に押しやられてものも見えず。心やましきをばさるものに

て、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずるなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、悔しう何に来つらん、と思ふにかひなし。

(3)ものも見て帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがに、つらき人の御前渡りの待たるるも心弱しや。笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに、常よりも好みととのへたる事どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ多みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人々うちかしこまり、心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまこよなう思さる。(御息所)影のみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるると、涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま、容貌のいとしう、出でばえを見さらましかば、と思さる。(一六〇八頁)

右には、(1)葵の上一行が物見車の居並ぶなかに無理やり押し入って、誰とも見知らぬながら奥ゆかしい車を力づくで

しりぞけた、(2)その車が御息所のものとわかり葵の上の供人がいよいよ無遠慮に蹴ちらすので、誰にも気づかれまいとした御息所は衆目にさらされる不体裁をいかんともなしがたい、(3)群衆のなかから出るに知られぬ御息所は葵の上方に圧倒されるみじめな気持で源氏の麗姿を拝するが、卑屈な思いながらも感動を禁じえない、という三つの段階が連鎖している。この車争いでは、かたくななまでに見られまいとする御息所の、徹底して衆目にさらされてゆくという点が、物語展開の眼目となっている。(1)↓(2)、(2)↓(3)への展開が、御息所の存在をしだいに顕わにしていく過程を語っているのである。

(1)において、まず語り手が群衆のなかで、「網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる裾口、裳の裾、汗衫など、物の色いきよらにて、さらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり」と凝視している。遠目からは平凡な物見車にしか見えないそれが、秘められた趣味の高尚さとして凝視されている。そして次の、退けられる御息所方の人々の言葉「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらざ」が、この語り手の叙述と内容的に呼応しているのだか

ら、この段階では葵の上方から、ただ者とも見えない品格やいわくありげな忍び姿はほとんど無視されている。かくして従者たちの喧争となり、(2)へと移る。

(2)の冒頭に「斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなり」とあり、ここでも語り手の言葉が状況察知を先取りしている。この「斎宮の御母御息所……」の品格の高貴さを加えた重々しい切り出し方は、(1)の語り手の言辭「……よしばめるに、……いときよらにて」などと連動して、さらに文末の「けり」の発見的感動の語法とも呼応しながら、真相の意外さに驚く気持ちを底流させている。また「忍びて出でたまへるなりけり」も、(1)の「ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる」とひびきあって意外なものの真相が明らかになる過程の文脈を形づくり、彼女の見物に出ざるをえなかった理由がおのずから「もの思し乱るる慰めにもやと……」と推測されることになる。この語り手の判断と推測に後続して、葵の上方の「つれなしくれど、おのづから見知りぬ」という察知が定位している。文脈を溯ってみるとこの「つれなしくれど」は、語り手の「忍びて」、さらに同じく「ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる」にも連動しているよう。ま

た「おのづから」の語には、判断に到達するまでのやや長い時間の経過が流れている。葵の上の人々はこのではじめて御息所と気づいたことになる。かくして作中人物たちの言動は語り手の介入によってよりの確に秩序づけられているのであり、語り手は作中人物の言動をより正確なたちで跡づけているともいえよう。さて葵の上方にはこれを契機に、「さばかりにては、さ言はせそ。大將殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」という相手方への嘲弄や侮蔑がまじり、その気持がいよいよ狼藉を激化させて、ついに「副車の奥に押しやられてものも見えず」「榻などもみな押し折られ」という始末になった。ここでは、光源氏の正妻方として、また権門左大臣家として自方の勢力を恃んで誇る者の意識が、光源氏の一介の愛人でしかない者への激しい圧迫として顕示されている。これに対応して、迫害される者の気持は「心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし」、あるいは「……また人わろく、悔しう何に來つらん、と思ふにかひなし」とある。直接的には御息所自身の心中をさしていようが、それだけではあるまい。何らの敬語表現を伴わないこの叙述は、それゆえに彼女の直接の心中叙述で

もあるまい。「いみじうねたきこと限りなし」や「思ふにかひなし」の文末は、前文の末尾「押しやられてものも見えず」からも連続的であり、作中人物の心情そのままであるよりも、語り手の口吻をもってしめくられた体である。

これは、御息所と従者たちとの共通感情が、語り手の共感によってとりおさえられているということではないか。車を蹴ちらされたことよりも、忍び姿の実体があばきたてられたことへの恨めしさが注目されるのだが、それは心内を見すかされた御息所の痛恨を含むとともに、そのような女主人に従うしかない従者たち自身の侮蔑される痛恨をも含んでいる。古注釈以来この「心やましき」云々について「これ物の怪になるべきはじめなり」(岷江入楚)などと読むのがむしろ一般的であるが、確かに物語の伏線ぐらいいは位置づけられるにしても、御息所自身の生霊出現の直接の由因とするにはやや一般的すぎる叙述であるようにも思われる。というのも次の(3)以下、右の叙述から離脱するあたりで、彼女自身の心情があらためて語り出されてくるからである。いいかえれば御息所の心情の真相は、右に共感されている痛恨以上のものだったということである。

(3)の「ものも見で帰らんとしたまへど」は、(2)の末尾

「悔しう何に來つらん、と思ふにかひなし」に導かれながら、あらためて、御息所ひとりの心情として語りおこされた叙述である。この場面は、好むと好まぬにかかわらず無理やり彼女を光源氏の行列に直面させている。文脈は「さすがに……心弱しや」と語り手の感想をはらんだ、いわゆる草子地でまとめられるが、しかしここでは御息所と従者たちとの共通感情などではない。源氏を見まいとする彼女の断念の意識の底にはびこっている、薄情な人とはいえずはり拝さずには済まされない源氏への切ない愛執を、無意識に現われる表情として語っている。すでにいわれているように、この「前渡り」は他の愛人のもとに通いつめる夫から素通りさせられる妻の位境をさす語である。ここでもその変型として、語り手が、夜離れの物思いに屈している妻の日常を、行列見物という非日常的な場面に集約して語っているのである。かくして御息所の現在の位境のなかでその意識と無意識が一回的にとらえられることとなり、それが「笹の隈、檜の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」(古今集、卷二〇)の歌を媒介として、「笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり」と鮮明に表現されることになる。隈(物

陰)は隈でも笹の隈ではないから、馬もとどめず源氏が通り過ぎてしまう、という和歌表現の規矩によった言語遊戲的な納得のしかたは、それだけに抗しがたい絶望的な思念をかたどっている。いったいこの(3)の「御前渡り」以下の叙述は、見られる源氏と見る群衆の關係を中心として展開し、源氏の超越的な魅力に衆目が集注している。群衆の視線を意識する源氏は、愛人たちを「ほほゑみつつ後目にとどめ」るのに対して、正妻葵の上を目前にしては「まめだちて渡」って歴然と區別し、また同行の供人たちまでもが「うちかしこまり、心ばへありつつ渡る」として正妻方を格別視している。そして源氏の觀察の埒外にある御息所は、彼のこの二種の觀察眼をとらえる。つまり源氏の、正妻と他の愛人それぞれへの対し方が、愛人の一人でもある御息所によって凝視されているのだ。御息所はここでは見られる立場から見られる立場に転じている。このような構成法から、正妻ではありえない自己の位置を相対的な確かさをもって「おし消たれたるありさまこよなう」と認知し、それが次の独自の独詠歌を生み出してくる。この歌は、さきの引歌表現の本歌「笹の隈檜の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」を媒介に、「影をのみ見—御手洗川」「愛

き—浮き」の掛詞や、「影」「川」「浮き」の縁語群を導き、そのことを通して本歌にはない「身のうき」者の固有の心象風景を描いている。川面に影だけをうつしながら止らず流れ去る御手洗川は、遠目にしか見えない源氏のとりつくしまもない「前渡り」である。そして縁語としての「浮き」は、御手洗川に浮ぶ泡沫のはかなさであり、そこから転じて薄運の自己の総体としての「身のう(憂)きほど」が定位されてくる。この独詠の後、御息所はふたたび見られることを畏怖する存在に戻る。「涙のこぼるる」自分の心が周囲の女房にさえ見抜かれることを警戒している。心の深奥にある源氏への愛執が、「……見ざらましかば」の反実仮想の構文でとりおさえられた意味は深長である。現実の裏返してしか源氏への執着を表現することができないのだが、実は先立つ独詠歌の「身のうき」はこうした愛執をも含めての表現であらう。なぜなら、遠目にしか見ることのできない源氏であるにもかかわらず、そのような源氏に呪縛されている自分の運命が嗟嘆されているからである。みてきたように物語は、こうした自己の心内を他者から見すかされまいとする御息所を、さまざまな視点から見つめてしまっている。

さて右に後続する物語は、(1)御禊供奉の一行中の光源氏の超絶的な麗姿に対する見物衆の驚嘆ぶりを語り、さらに(2)彼の忍び通う愛人たちの人数ならぬ身の悲嘆、式部卿宮の賞賛や娘朝顔の姫君の感動と自制にふれ、そして(3)車争いの噂を聞き知った源氏の御息所に対する憐憫、に及んでいる。ここでは物語が、六条御息所を直接介在させずに、彼女が存在する御禊供奉見物の場として設定されている。

この(1)↓(2)↓(3)の文章の転展については、詳細な分析を試みた秋山虔氏の見解⁵⁾によりたい。氏によれば、(2)は(1)における群衆一般の光源氏頌「何とも見入れたまふまじきえせ受領の女などさへ、心の限りつくしたる車どもに乗り、様ことさらび心げさうしたる……」を、副詞「まして」で受接せしめることによって、「まして、ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所どころ」の人知れぬ悲嘆がとらえられ、さらにその日蔭者という存在から対照的に朝顔の姫君の、源氏に動揺しながらも靡かぬ志操堅固な存在が引き出されてくる、そして以上の経緯を媒介に(3)へと連接して、朝顔の姫君と対照的にうちひしがれた六条御息所の問題に源氏の心の側から突入し、御息所との絶望的な関係を反芻することになる、というのである。さらに氏は、「一方で光源

氏への絶讃があり、一方でかれの内面のいかんともなすすべ知らぬ暗澹が語られ、それが単に対照をなすという性質のものではない。前者が、そのもののなから後者をつむぎ出す動的様態なのであり、ここに源氏物語の文体の顕著な特質がある」と結ぶのだが、ここで、そのような自転的ともいうべき動的様態の文体が成り立っているのはなぜであらうか。それは、見る者と見られる者の複雑な相對關係によって物語が構成されていることと無關係ではあるまい。いったい車争いを含む御禊供奉見物の場では光源氏が衆目を一点に集注させているのだが、さらにここに登場以來の御息所に対する全身的な視線が持ちこまれ、物語は見られる者と見る者の位置を相互に流通せしめることになった。物語の語り手は、さまざまな人物たちの視線を秩序づけ、しかも自らの視角も一樣でないように、語りすすめているのである。六条御息所が、葵の上方に自己の心内を見抜かれたという意識を通して、己が運命のつたなさを痛恨するにいたるもの、それじたい葵の上への過度の被害者意識のようにも見えるが、しかし自ら光源氏のはええしさを目にも見、また自ら意識するしないにかかわらず多くの人々から注視されているという、多様な視点によって

次々とその位境が相対化されてみると、まさしくそれに対応すべき意識というほかないのである。ここに多様な視点による、見ると見られるの相互流通がある。御息所が直接介在しない場でありながら、彼女の位境が相対的に明証されるのも、じつにこの多角的視点に由来している。

つづいて物語は右に連接して、翌日の源氏の祭見物を叙述するが、ここでも光源氏が多様な視点から見られることを通して逆に御息所の位境が証されることになる。まず源氏が二条院で紫の上を見物に連れ出す経緯が述べられ、後半の見物の場では老女源典侍との歌の贈答となる。前半紫の上の可憐さへの執着は、先立つ御息所に対する重苦しい思念からの反転であり、そのことが逆に彼の御息所への複雑な愛憎を証している。また後半の源典侍との贈答が可能となったのは、その好色の老女として一貫した人物の、臆面もない懸想心からであった。他方こうした特殊な性癖のない愛人たちは、同乗する紫の上の存在に気づいて源氏との挨拶も憚らざるをえなかったという。この人々の源氏と繋ることのはかなさは、六条御息所とて大差ないことになろう。

四

車争いを含む一連の祭見物の叙述の後で、あらためて六条御息所の心内が狙上にのぼせられてくる。

御息所は、ものを思し乱るること年ごろよりも多く添ひにけり。つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人わらへにならんことと思す。さりとして立ちとまるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、「釣する海人のうけなれや」と、起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、悩ましくしたまふ。大將殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず、「数ならぬ身を見まうく思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかひなきにても、御覧じはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰む、と立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり。

冒頭の「ものを思し乱るる」の「もの」は接頭語の程度ではなく、魂の根源の意に近い。その深い憂悶が「年ごろより、多く添ひにけり」とあり、以下は源氏と関わりはじめてからの年月を回顧する叙述であるが、単なる回想というよりも、全体に車争いを経た現在の心境が投影された叙述とみるべきであろう。「葵」巻登場以来、源氏を諦めて伊勢に下向するか否かを悩んでいるが、ここではそれに関して、下向すれば「世の人聞きも人わらへにならん」、逆に都にとどまっていれば「かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめる」と、いずれにせよ同じく世間の物笑いにしかなりえない自己のぶざまさが思われ、低迷に屈している。いったい光源氏に関わって「人わらへ」の語を発する女君には、自己の身の破滅を思う危機意識があり、しかもその意識を根拠に新たに生きよみがえるべく自ら転身を遂げるという構造的な特徴のある点が注意される。不義の子（冷泉帝）を出産して「人わらへ」を思った藤壺は弘徽殿女御に対抗して生きることを決意し、明石の君は「人わらへ」を意識するところから愛児を紫の上の養女として手放した。紫の上は女三の宮降嫁後の「人わらへ」から精神とは

別個の良俗的な処世態度を強めた。六条御息所もまた、結局はこの意識から下向の決意を固めていくことになる。世の物笑いが身の破滅の意識であることは藤壺・明石の君・紫の上と同じであろう。そして右の文脈ではどちらにせよ世間の物笑いだとして保留にされているのだから、ここではそれが彼女の思考判断のほとんど唯一の基準にさえなっているとみられる。御息所がこれほどまでに世評を気にかけねばならぬのは、それだけ世人に注視されているという意識が先行しているからである。となれば、右の思考感情は、車争い後の「かかるやつれをそれと知られぬる」という叙述を通過し、わが「身のうき」の自覚を経由してからでなければならない。右に「かくこよなきさまに」とあるのも、現在のそれを受け接した意味である。右の回顧が現在の心境に侵蝕されているゆえである。そして右の叙述を「立ち出でたまへりし御襖河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく、思し入れたり」と結んでいる点も、車争いで内心を見られてから後の現在の心境であり、どのみち「人笑へ」にしかかなりようのない自己の運命が「うく」と自覚されているのである。

右の心中叙述につづいて、物語は執ねき物の怪に苦しむ

葵の上とその周辺を語る。つづいて、この葵の上の叙述から反転するかの様に、

院（桐壺院）よりも御とぶらひ隙なく、御祈禱のことまで思し寄せたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人（葵の上）の御身なり。世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争いに人の御心の動きにけるを、かの殿（左大臣家）には、さまでも思し寄らざりけり。（二六―七頁）

とある。桐壺帝をはじめ世人のすべてから惜しまれる葵の上の絶大さに、御息所が常とは異なる敵愾心を抱くのは、車争いでの体験があったからだという。御息所以外には「はかなかりし」事件でしかなく、葵の上方にしても「さまで思」わぬ出来事であるにもかかわらず、当人にとって決定的な重大事であったのは、繰り返すことになるが、自己の内心があばき出される思いだったからである。

御息所にとって自分の心を見すかされることが決定的であるのは、すでにいわれているように、かつて東宮妃として厚遇された者の自尊心がそれを許さぬからである。光源

氏の魅力がどんなに絶大であろうとも、むしろ絶対的であればあるほど、かつての寵姫ゆえに、正妻ならざる日蔭者のみじめさが彼女の自尊心をうち砕くことになる。この、うちのめされる自尊心のみじめさについては従来いわれてきたとおりであるが、ここで問題なのはそうした自覚がどのように、なぜ彼女の心内に招来させられたかという物語の構成的な必然性を問うことであった。

さらに後続の叙述を追ってみよう。久びさに源氏が御息所を訪ねた、その帰りぎわの一節である。

うちとけぬ朝ぼらけに出でたまふ御さまのをかしきにも、なほふり離れなむことは思し返さる。やむごとなき方に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、ひとつ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ暮つ方ある。源氏「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいという苦しげにはべるを、えひき避かでなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから、

御息所「袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り

立つ田子のみづからぞうき

山の井の水もことわりに」とぞある。御手はなほここの人の中にすぐれたりかし、と見たまひつつ、いかにぞやもある世かな、心も容貌もとりどりに、棄つべくもなく、また思ひ定むべきもなきを苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、(源氏)「袖のみ濡るるやいかに。深からぬ御ことになむ。

浅みにや人は下り立つわが方は身もそほつまで深きこひちを

おぼろげにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ」などあり、(二八―九頁)

源氏の立ち去り姿にやみがたい執着心が燃えあがるとともに、葵の上の正妻としての動じがたい存在が想起され、前掲の、日蔭者でしかない苦衷が反芻されてくるというのである。御息所にとって源氏の来訪が「なかなかもの思ひのおどろかさるる心地」よりほかにないというのは、単に葵の上や源氏を恨み憎む気持からではない。源氏と関わることの不幸を十分知りつつも、魂を抜かれたごとく魅せられている己が執着心を扱いかねている苦悶が絶望的なのである。右の「袖ぬるる」の歌は、断念と愛執のはざまにさま

よう自分を凝視する表現として注意される。もとより源氏の書簡に応じた返事ではあるが、源氏のそれが「御文ばかり」であるところからも作品中の贈答歌のあり方として、これは異例の女からの贈歌だったことになる。御息所から詠みかけなければ贈答歌の交されるすべのない源氏の気重さと御息所の執着がここに読みとられよう。彼女の歌が源氏の文面とあい関わらぬ点はいうまでもないが、ここには「泥路―恋路」「水―自ら」の掛詞、「濡るる」「泥路」「田子」「水」の縁語によって織りなされる絶望的な心象風景が定位されている。泥まみれで農作業に余念のない田夫の姿が、そのまま恋の執ねき愛憎に呻吟する御息所の心象である。これに対して源氏は「こひぢ」「下り立つ」を共通語句として返歌しているが、せいぜい、「浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ」(古今集、恋三、業平)を真似たぐらいの返歌の作法であり、固有の心象表現にはなっていない。この相違が逆に御息所の表現の独自性をきわだてることにもなる。そしてここでも彼女は、そうではしかありえない運命のつたなさを見つめ、「みづからぞうき」としている。車争いの折の「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」の歌に始ま

り、後の心中叙述「御襖河の荒かりし瀬に、いとどよろづ
いとう、思し入れたり」を經由して、この心象風景が描か
れたのだといってよい。

以上縷々となぞってきた「葵」巻登場以来の御息所の物
語叙述が、小稿冒頭に掲げた自ら生霊出現を納得する叙述
へと連なっている。そこでは、憎悪や怨念から他者を呪う
などの気持からではなく、ただ「身ひとつのう、き、嘆き」
「宿世のう、きこと」を反芻するしかなかったという。この
運命の痛恨は車争いを契機にしてしだいに明らかにされて
きたのである。これまでその具体的な関連を発端から跡づ
けてきたつもりである。すなわち御息所は「葵」巻登場以
来、その自尊心から自己の心内を他者に見られまいとたか
くなく構えながらも、作中人物の多様な視角から無理やり
にもものぞき込まれてしまった。物語の語り手は自らも多角
的な目を持ちながら、さらに大勢の視点を秩序づけている
のであり、ここに物語の独自の構成法と表現法が工夫され
ているといつてよい。これは、この物語における「語り」
の一つの表現性とみられるであろう。かくして御息所は自
分が他者から見られているという意識を抱くことにもなる

が、実際に見られることが顕わにされるのは車争いの場
においてではない。しかしながら彼女の心内に育まれる見
られるという意識は、物語全体の展開によってしだいに明
らかにされてくる、彼女への多様な全視線とまさしく対応
していよう。むしろそれは彼女自身の肉眼には見えるはず
のない他者の視線だったのであるが、自分が見られている
という彼女の想像は確かすぎるほど確かなのであった。し
たがって、車争いだけならばやや過度の被害意識ともみら
れる己が運命への痛恨を、いわば物語の全体相が証してい
るともいえるのではないか。そして御息所の、他者から見
られる心と他者を見る心が自己の悲痛な運命を自覚させる
ことになるが、そのことが、自らをしてそのすさまじい痛
恨ゆえに生霊にも出現しかねないと告白させるのである。
冒頭でふれたように御息所は、怨霊の家系の一人として、
意識下から物の怪になりうる存在であったかもしれない。
しかしそれとともに、彼女の内部においても、物の怪にな
らざるをえなかった意識の脈絡が必然的にたどられたとい
うことである。「語り」の独自の表現が、それを的確にと
りおさえているといえよう。

〔注〕

- (1) 小稿における本文の引用はすべて、日本古典文学全集(小学館)『源氏物語』による。
- (2) 川崎昇氏「六条御息所の信仰的背景」(国学院雑誌・昭42・9)以来、これに従う論考が多い。森一郎氏「六条御息所の造型―その役割と問題」(岡山大学教育学部研究集録、37号)、深沢三千男氏「六条御息所悪霊事件の主題性について」(『源氏物語とその影響、研究と資料、古代文学論叢』第六輯)など参照。
- (3) 三谷栄一氏『物語史の研究』『日本文学の民俗学的研究』。あるいは藤井貞和氏『源氏物語の現在』など参照。いずれも、源氏の六条院が六条御息所の故地に造営されることの意味にふれている。
- (4) 今井源衛氏「『前渡り』について―源氏物語まで」(中古文学、17号)。
- (5) 秋山虔氏『王朝女流文学の世界』。
- (6) 拙稿「光源氏の女君たち」(『源氏物語とその影響、研究と資料、古代文学論叢』第六輯)。